
銃と魔法と眼帯とメイドモノ！

ハモニカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃 と 魔法 と 眼帯 と メイド モノ ！

【Nコード】

N5890Z

【作者名】

ハモ二カ

【あらすじ】

どうも、あたしはファルケン家に仕えるメイド、フランと申します。今日も今日とてお嬢様のお世話に明け暮れる日々を過ごしております。……はて、大切な事を言わなければいけない気がするのですが、覚えてないので失礼させてもらいます。では

（ここからは作者が引き継ぎます）この作品は実際の某冒険者育成ゲームとは一切関係ありません。関係ありませんったら！大切な事なので2回言いました！それとキーワードですが、まだ出

てきていないものは」 で囲んでおりますので、ご理解ください！ その他、適時キーワードは追加、もしくは変更されますので時々キーワードを見ると何か分かるかも？ 一応キーワードは本編で出てきたらカッコを取る予定ですが、忘れていたらご報告くださいませ。

第00話 始まりの夢（前書き）

皆さん、メイドと聞いてまず初めに誰を思い浮かべますか？

作者はロベルタでした。だから銃なのかも……。

これ、ある意味駄目な例ですかね？w

まあ、

始めましょうか！

第00話 始まりの夢

暗い。

目を閉じている訳ではない。

瞬きを試みるが、閉じた時と開いた時の暗さはほとんど変わらない。
い。

ただ、声が聞こえる。

女性の声だ。

酷くノイズがかかっていて、ほとんど聞き取る事も出来ないのだが、
自分に向かって何かを言っているように思える。

声の主に心当たりはない。

いや、思い出せないだけなのだろうか。

物忘れが激しい自分の短所が改めて嫌になる。

記憶が曖昧になるおかげで、大切な事も、何もかも、時が経てば零
れだしてしまう。

大切な人との思い出も。

楽しかった記憶も、悲しかった記憶も、今の自分を形作ったであろう全てを。

闇の中でふとそんな事を考えてしまう。

この自問自答もおそらくこれが初めてではないだろうし、最後になる気もしない。そのうち、こんなことを考えていた事すら忘れてしまうのだから。

悲しい、とは思わない。

いくら大切な思い出も、忘れてしまえば結局有象無象の記憶の中の1つであることに変わりはないのだから。

だが、記憶を共有した者が悲しむ顔は見たくない。

それくらいの感情はある。

声がまた響いてくる。

先ほどより幾分か鮮明になったようだが、それでもその言葉を判別するにはいささかノイズが酷い。

自らの意志は必死に言葉を理解しようとしている。

にも関わらず脳がそれを拒否しているかのようにノイズをかけてしまう。まるで思い出させないようにしているかのようにだ。

あなたは誰？

声に向かってそんな事を尋ねてみるが、返事はない。

広い部屋で声が反響しているようにも聞こえ、同じ言葉を何度も言っている。

酷く切迫しているように聞こえる

それが何を意味するのか全く理解できずに、ただぼんやりとそれを右の耳から入れて左の耳へと流していく。

あたしは、誰？

先ほどの問いを思い出して、そんな事を考える。

いや、名前はある。

大切な人から貰った、大切な名前。

埋もれていく記憶の中で、決して失いたくないと心の底から思えるものだ。そしてもちろん、それを与えてくれた人も忘れたくない。

だが、それが仮初めの名に過ぎないのは自分でも分かっている。

生まれて十数年、名無しの権兵衛であつたつもりはない。

つまりは、本名という事だ。

最愛の両親から貰ったであろう自分の本当の名前。

思い出そうにも、そもそも親の顔すら覚えていないのだ、それについて考える事すら滅多にない。

あたしは……

不意に、声が鮮明になってくる。

起きて

「ん……」

少女は目を覚ました。

それほど豪華ではないが、決して貧しくはないベッドの布団の中でもぞもぞと足を引っ張る眠気を振り払ってベッドから脱出すると、窓のカーテンを横に引く。

朝の眩しい日差しが部屋に差し込み、少女は眩しそうに目を細める。

「……妙な夢を見ていたような気が……」

何か、心に引っかかる、そんな夢を見ていたような気がするが、夢の内容は不思議と頭の中に浮かんでこない。

首を傾げながら少女は窓を開け、部屋に朝の涼しい風を招き入れる。

壁掛けの時計に視線をやると、時計の針は丁度5時30分を指していた。

早起きがこの身体に馴染んだのも随分と昔のように思われる。

とはいえ、この時刻に起きなければ仕事が出来ない。

少女は部屋の隅にチヨコンと置かれた机に向かうと、机の上に置かれていた黒い物を手に取る。布のようだが、形が独特だ。中央の幅が広くなっており、隅が著しく細くなっている。

少女はそれを顔の前に持つてくると丁度顔の左半分が隠れるようにそれを押し付け、細くなった部分を頭の後ろに回して慣れた手つきで結んでいく。

鏡を見る必要すらなく、その黒い布、俗に眼帯と呼ばれるものを装

着した少女はベッドの布団を畳んでシーツに出来たしわを出来る限り手で伸ばしておく。

それを終えて少女はようやく着替えを始めた。

少女の身体には不釣り合いな大きさのクローゼットの扉を開くと、そこには数着同じ色、形状の服がかかっていた。少女はあまり考える事もなくそのうちの一着をハンガーごとクローゼットから取り出すとベッドの上に置いてブカブカの寝間着を脱ぎだす。

とてもじゃないが少女の小柄な身体には合っていないところを見るに誰かのお下がりなのかもしれない。

寝間着を脱いで先ほど取り出した服を手早く着ると、そこでようやく少女は鏡の前に行き、全体に不自然なところがないか確認する。

白と黒を基調とした服、フリルが特徴的な白いエプロンと黒い服を組み合わせたような服を鏡越しにしげしげと見つめ、本来とは反対側に折れてしまった部分を指で直していく。

長い茶色のウィッグを少女は自分の本来の髪の色である黒が見えないようにしながら装着、その上から机の引き出しに入っていた白いカチューシャをつける。鏡の前におかれた小さな瓶の中に浮かぶ茶色いコンタクトをぶれずに目に入れ、鏡の前に立つ。

これが少女の仕事服だ。

少女は鏡で最終チェックを済ませると満足げに頷いて少女は部屋の扉へと歩き出す。

ドアノブには革製のベルトが引つかかっている。そしてそのベルトにはホルスターが付いており、黒光りする鉄製の物体がホルスターに収まっている。

少女は扉を開く前にその俗にガンベルトと呼ばれる革製のベルトを服の上から腰に巻きつけるとホルスターから少女の顔ほどもあるうかという巨大な銃を抜く。

黒光りするその銃はどこどころ塗装が剥けているが、手入れ自体は隅々まで行き届いているようだ。回転式の弾倉を開いて中に何も入っていない事を確認し、一度撃鉄を上げて軽く引き金を引く。

金属が金属を叩く甲高い音が響き、撃鉄が正常に動作することを確認する。

少女は30センチはあろうかというその銃をホルスターに戻すとホルスターの横についたポーチを開ける。

中には丁度先ほどの弾倉に収まりそうな大きさの丸い球が無数に入ったケースが収納されていた。中身が空ではない事を確認するとポーチを閉じる。

少女はガンベルトを掴んで思い切り回転させ、ホルスターを丁度背中に戻って前からは見えない位置まで移動させる。

「さて、お仕事お仕事」

少女は1人小さくそう呟くと部屋の扉を開いて廊下へと出ていった。

第00話 始まりの夢（後書き）

はい、どうも、おはこんばんちは、作者のハモニカです。

この度はこの作品、『銃と魔法と眼帯とメイドモノ!』を左クリックして頂きありがとうございます。

ゆっくりと、まったりと、急がず焦らず、二日に一回更新なんて自殺行為はしないよう行きますので、完結までお付き合いして頂ければ幸いです。

『銃と魔法と眼帯とメイドモノ!』、略して『とととモノ!』

始まります！

パクリじゃないです！

読めば分かります、きつと!!!(キリッ

それと、誤字脱字含め、感想を頂けるとハライソに昇ってしまうくらいハモニカは喜びますので是非、ご感想を下さい！

ただ、ハモニカはチツキンなので批判的なご感想はかなーりソフトな言い方をお願いします。かなーり効きます、それこそ想定外に。

では！

第01話 メイドの朝は早い（前書き）

とりあえず、言いたい事は第00話の後書きで言ったので、レッツ
ラゴー。

第01話 メイドの朝は早い

「おはよう、フラン」

メイドの朝は早い。

自分が仕える主が起きる数時間前には眠気を地平線の彼方へと吹き飛ばして朝の仕事をこなさなければならない。

「おはようございます、メイド長」

眼帯をした少女、フランが広いダイニングに顔を出すとフランと同じ格好をした女性がテーブルの上を綺麗に磨いていた。

美しい金髪を腰まで伸ばしたこの屋敷のメイド長、メリスは威厳のある表情を変えことなくフランに挨拶をしてきたため、フランは軽く会釈をするとダイニングに隣接した調理場に向かう。

「おはようございます」

調理場はダイニングに隣接しているとはいえ、少々距離がある。もちろん、朝から調理している音などで目を覚まさせないためだ。特にこの時間帯は主と食事の時間を被らせないように早起きしたメイドが朝食を取るために否応なく物音は増えてしまう。

フランは調理場に入ると中にいた男性に声をかける。

男性はフランを一瞥すると小さく頷き、座っていた椅子から立ち上がるとキッチンの前に立った。

男性の名はデックス。

この調理場の王として君臨している。フランがこの屋敷の世話になる前からいるため、彼女は詳しい経歴を知らないが、腕は確かだ。作れない料理はない、とまで噂されているほどで、事実常人が思いつく料理はたいてい作れる。

デックスの調理姿を眺めながらフランは近くにあつた椅子を持ってきてキッチンのスペースがある場所の前に置き、その上に腰かけて朝食を待つことにした。

しばらくしてデックスが皿にハムエッグとサラダを盛り付けてフランの前にやって来た。フランがそれを見て満面の笑みを浮かべると寡黙で無表情なデックスの表情も一瞬緩んだように思える。

デックスはこの屋敷の調理場を1人で切り盛りしている訳だが、主であろうと使用人であろうと分け隔てなく全力を以て調理してくれる事で評判だ。定期的に新作を考案してはその評価をメイドや執事に頼んでいるため、彼らの間ではちよつと得をした気分になれるそうだ。

フランは目の前に置かれたハムエッグと近くに切った状態で積み重ねていたパンを一切れ取って今日の朝食とすることにした。

「では、頂きます」

パンを手を千切って一口大にすると口の中に放り込む。ジャムなど

何もつけずとも素の味で満足できるのも、このデックスの料理の特徴だ。

サラダにフォークを刺そうとした時、調理場の扉が開いてフランと同じメイド服を着た少女が入ってきた。青い空を想起させる青い目と髪が特徴的で、まだどこか幼さが残っているような少女はフランに気が付くと笑いながらその隣に椅子を持って歩いてきた。

「おはよう、フラン」

「おはようございます、クレア」

身長はフランとほとんど変わらない。一応フランよりも年上という事のはずなのだが、童顔のおかげで幼く見えてしまう。

「ナトリ、あたしにも同じのを頼むよ」

ナトリとは、デックスの名字だ。デックス・ナトリ、大抵の者はデックスと呼ぶが、ナトリと呼ぶ者も少なくない。とはいえ、片方しか使わない者の方が珍しく、その時の気分で呼び方はコロコロ変わっている。

デックスはクレアに小さく頷くと再びキッチンに向き合いフライパンに流れるような手つきで油を引いてハムを敷き、卵を落としていく。

「さっきね、ダイニングで姉さんに怒られちゃったよ」

「メイド長に？ 今度は何をしたんですか」

クレアはメイド長であるメリスの妹だ。自分であろうと他人であろうと厳しいメリスも妹にだけは甘いかと思えば、そんな事はなく、むしろ妹であるがゆえに厳しい面もある。

そのため、クレアがメリスに怒られるのは別段珍しい事ではない。

だが、今日のようにそれを話すのは珍しい。

そう思ったフランは食事の手を休めてクレアに顔を向けた。

「それがねえ、『後輩より起きるのが遅いのは先輩として失格だ』、ですって。フラン、明日からあと5分寝坊してえ」

今にも泣きそうな表情をするが、こういう時はたいてい同情を誘っているのだ。特に怒られた原因が目の前にいるのだから、そう言いたくなるのも分らないではない。

「……クレアがあと6分早起きすれば済む話じゃないですか」

何事かと心配してしまった自分と、大事のように文句を言うクレアに呆れながらそう言っていると、クレアが足をバタバタさせながら抗議を始める。

「良いじゃない、フランの仕事は7時からでしょう？　ならそれくらい……あだっ」

クレアの抗議を遮る様に綺麗に拭かれたお玉がクレアの前頭部を軽く叩いた。見ればデックスが皿を持って立っていた。

「ほら、デックスも言ってるでしょう」

「……言ってないよ……」

額を摩り、渋々黙り込んだクレアはパンを頬張ってすぐに笑顔になる。

「んゝ やっぱり焼き立ては美味しいねゝ」

数十秒前の顔が嘘のように屈託のない笑顔に戻ったクレアに、フランもホッと溜め息をついて自分の食事に戻る。

「デックスはわざわざあたしたちのためにまで焼き立てのパンを作ってくれるし、本当に他の屋敷の料理人も見習うべきね」

「それはそうですね。まあ、ここ以外をあたしは知らないんですけど」

他を知らなくても、デックスがこれ以上になく出来た男であるのは分かる。黙っていても自分のやるべきことと相手が望むことを合致させるという技を習得しているのだ。これで愛想も良かったらそれこそ完璧な人間になるだろう。

フランは先に来た分、クレアより幾分早く食べ終わった。

これからが本来の仕事であるデックスの手を煩わせるわけにはいかない。なので食事の後片付けはフラン自身がやる。「ごちそう様」とデックスに礼を言って皿とコップ、フォークなどを重ねて流し台へ向かう。

流し台は昨日の夜に水跡1つなく拭かれたままの状態、フランは

少し得をしたような気分になりながら蛇口をひねり、水を出して皿を洗い始める。

さすがに主が使う食器とは分別がされているが、次に誰が使うか分からない食器であるため、いつものように丁寧に、次に使う人が眉を顰めないように丹念に汚れを落としておく。

それが全て一段落した辺りでようやくクレアが食事を終えたが、その時には料理場の時計が6時20分を指そうとしていた。

「クレア、あなたは今日はメイド長と同じシフトだったんじゃないんですか？」

「ほえ？ …………… あ」

「…………… はあ、洗っておきますから言い訳を考えておいた方がいいですよ」

「うわわ、1日2回なんてどんな顔して行けばいいんだよ……………」

今度こそ本当に泣きそうになっている。

さすがにこれには同情する。

メリスはとにかく厳しい。先ほどのクレアのようにちょっとした事から徹底的に教え込まれるため、フランもこの屋敷に来た頃は苦労した。

だが、その分面倒見が良いのも確かで、相手の物覚えが悪いからと言って文句を言ったり、放り投げたりは決してしない。あくまで自

分の仕事は徹底的に仕上げるのが彼女のモットーだ。

今日のシフトではメリスとクレアが朝の掃除当番なのだ。掃除はなるべく早い時間帯に行われ、主が起きてくる頃には埃1つない状況にしておかなければならない。

本来掃除は6時頃から行われる予定なので、クレアも十分間に合う時間帯に起きているはずなのだが、食事にかまけている間に時は無情にも過ぎ去ってしまっていた。

「はわわ……」

情けない声を上げながらクレアは調理場を慌ただしく飛び出していた。

「まったく……」

先輩のはずなのだが、先輩らしい頼もしさの欠片もないクレアにため息をつきながらフランは手早くクレアの皿も洗っていく。

洗った皿は隣のかごに移していき、最後の皿を洗い終わるとタオルで手を拭いて一度時計に視線を向ける。時計は6時45分を指している、フランの仕事が始まる時間が近づいている事を示している。

「……えーと、デックスさん、今日のお嬢様の朝食は？」

デックスに顔を向けると、デックスがキッチンの引き出しから1枚の紙を取り出し、フランに手渡してきた。そこにはフランの求める朝食の献立と使われる材料、さらにはその生産地までが事細やかに書かれている。

フランは書かれている字を目で追いながらそれを頭の中に叩き込んでいく。

「これだけは慣れませんか……」

一通り目を通すと紙を裏返して書かれていた情報を暗記できているかブツブツと呟き始める。何を聞かれても答えられるように覚えていく訳なのだが、生産地などはそう毎日変わるようなものではない。それでも頭に入らないためにフランは毎日その日の献立をなるべく記憶の新しい場所に入れる必要がある。

「ええと、スープのトウモロコシは……ファイ、……フィル、あれ、フィリ？」

そして案の定頭に入っておらず、何とか思い出そうと頭を抱えるがどうしても出てこない。

「……フィリアコフ産」

「そうです、フィリアコフ産です！ ああもう、デックスさん、もっと短い名前の土地から仕入れられないんですか？」

それは無茶だ、という視線だけが返される。

材料の仕入れ先は基本的にデックスが決めている。彼自身が現地に赴き、納得がいく質、量、そして価格であればその場で交渉しているそうだ。

そのため、季節の変わり目になると時折デックスが調理場を空ける

時がある。そう言う場合はメイドと執事で切り盛りするわけだが、デックスと比較して味が落ちてしまう事は回避できない問題だ。デックスの料理の腕に張り合おうとする人間が過去にはいたそうだが、その無双っぷりの前に誰一人として勝利を収める事は出来なかったそうだった。

あのメイド長であるメリスでさえ、勝利は叶わなかったとか。

そのおかげでデックスはこの調理場において絶対的な権力者として君臨している。彼が許さなければ調理場で調理する事すらままならないと言っても過言ではないし、そこまでして調理しても結局は彼と比較され負けるのが見えているこの屋敷の人間はそんな事をしない。

「むう、朝食はまだ覚えやすいはずなんですけど……」

朝食は寝起きという事もあり、さっぱりとしていてあまりたくさん出さない。そのため問題はむしろ夕食である。

それなりの量を出すし、必然的に材料も増え、覚えなければならぬ事が増えていく。朝からこの調子では今日一日苦勞してしまう。

そんな事を考えながらも一度献立と材料の産地が書かれた紙とにらめっこをし始める。

時計の針は6時55分を指そうとしていた。

「はあ、結局全部は頭に入らなかった……」

朝食は基本的にフランたちが食べたものと変わらない。フランたちと違うのは温かいコーンスープが付いていることくらいだ。覚えるべき材料にしても、小麦や卵、肉と言った比較的安定した産地を持つものだけだったのだが、それでも小麦の産地を覚えると卵の産地を忘れ、卵の産地を覚えると肉の産地を忘れるという、どうにもならない状況に陥ってしまった。

「お嬢様、トウモロコシの産地だけは聞かないでくださいね……」

最終的に妥協したのはトウモロコシの産地だ。一番最初に覚えたような気もするのだが、そんな事もすでにフランの中では大昔の事になっている。

フランは今この屋敷の実質的な主の寝所へ向かうために廊下を歩いている。朝の日差しが窓から差し込んでおり、心地よい涼しい風がフランの頬を撫でていく。

時間は定刻きっかり、遅すぎず早すぎずと言ったところだ。そして

たとえ遅くなっても廊下を走るような事はしない。

足音を立てず、服が擦れる音すら極力出さないように心がける。

「……はあ」

フランがメイドの基本的な事を守ろうとしているのに、屋敷のどこからクレアの悲鳴が聞こえてくる。大方、メリスに叱られているのだろうが、本当に年上かと疑わせるほどクレアは子供っぽいところを持ち合わせている。

「お、フラン。時間きっかりだな」

目的地である部屋の前にたどり着くと、既にその扉の前には1人の執事が立っていた。背が高く、茶色の髪をオールバックにしているその執事はフランに気が付くと胸ポケットから懐中時計を取り出して時間を確認した。

「すみません、グラントさん。朝の献立が頭に入らなくて」

「ふむ、では私も朝食に付き合おう。分からないことがあればフォローしよう」

わずかに小じわが見えるその執事、グラントは気さくに笑みを浮かべてフランの頭を撫でた。

傍から見ていれば父と子が話し合っているようにも見えるかもしれない。とはいえ、このグラント、40代後半を思わせる風貌だが実年齢は30代、歳の割に老いて見えてしまう事を彼自身もコンプレックスにしている。

特に年齢の話題を出されると年頃の女性を思わせるほど敏感に反応するほどだ。

フランはグラントの言葉に満面の笑みを浮かべる。

「グラントさん、この感謝は絶対に忘れませんよ」

「はは、それほど大それたことでもないだろう」

グラントはメリスと共にフランをメイドとして鍛えてくれた人物だ。メリスが家事全般を教えてくれたのに対し、グラントは外での仕事を中心に教えてくれた。

特にデックスがいない時や、自分たちで何か食べようと思った時のために近くの市場で食糧調達が出来るように実地で練習させられた時は、さながら小さい子供に初めてのお買い物させる父親のような目で見られてしまった。

あの頃はまだ頼まれた食材のイメージと実際の食材の姿が一致せず、間違った食材を買ってしまう事も多かった。今でこそとんでもない物を買うような事はなくなったが、それでもたまに似たような食材を間違える事があり、その度にメリスやデックスにはため息をつかれてしまう。

「そういえば、奥さんの調子はどうですか？」

「今日の献立も覚えていないのに妻の事は覚えているのか」

「うぐ……」

悪気があつて言っているのではない事はその表情を見れば分かるのだが、それでも何か頬を叩かれたような気分になってしまう。

「やっぱり、印象的な事は頭に残るっていうか、なんというか……」

「まあ、お嬢様の食事と私の妻を両てんびんにかけるなら、そうなるかもしれないが……」

さらっと執事として随分と失礼な事を言っているが、現在の彼の妻の状態がそれほどなのは確かだ。

「はは……、確か4カ月、でしたか？」

「そうだ、安定期になって随分だが、最近お腹が大きくなってきてな。ようやく実感が湧いたよ」

話の内容からも分かる様に、グラントの妻は妊娠している。執事としては既婚者であるグラントは現在3人家族、もうじき4人目の家族が加わるうとしているところなのだ。それ故にグラントも最近の仕事は早く切り上げたり、シフトを他のメイドたちとは軽くしている。

仕事と家族を両立させている数少ない成功例らしく、毎朝早い時間帯に自宅から徒歩通勤している。フランたちのように住み込みで働いている者が圧倒的に多い中ではかなり珍しい部類に入る。

「今日も早く仕事を終わりに？」

「そのつもりだが、まあそうも言ってられん状況になりそうなので

なあ……」

フ란の問いにグラントが渋い顔をする。

「……確か、お嬢様はクラスは……」

「うむ、私たちの予想通りになれば早帰りともいかん。妻にも今日明日は遅くなると伝えているし、問題なかるう」

グラントの言葉にフ란は小さくため息をついてしまう。

ポケットから小さな手帳を開き、予定表のページに目を通すと、2人の懸念通りの事が書かれている。物忘れが激しいフ란にとって手帳は必要不可欠、決して忘れる心配をしないで済む。とはいえ、時折「書いたという事実」すらスッポリ忘れてしまう事もあるのだが。

「先の事をくよくよ考えていても仕方ないな。さて、仕事に移ろう」

「ですね、では」

グラントが気を取り直して着ている服の襟を正し、フ란も自分の服が不自然ではないか確認する。

そしてフ란が準備万端になったのを確認してからグラントは両開きの扉を軽く二度ノックすると「失礼します」と言っでドアノブを回した。

グラントに続いて部屋に入ると、広い寝所が視界に入る。入って左手にベッドがあり、布団の中で丸まっている少女がいる。グラント

は小さくため息をつきながらおそらく昨日のままの状態であったのだろう机の上の本や椅子の背もたれにかけられたままの服を片付け始める。

フランはそれを横目にベッドの横に立つと布団の中を覗き込む。

ベッドでは燃えるような紅い髪の少女が規則正しい寝息を立てている。

「お嬢様、朝ですよ」

それがフランの始業ベル代わりでもある。

第01話 メイドの朝は早い（後書き）

感想、誤字脱字報告、お待ちしております。

第02話 メイドの仕事に他意はない（前書き）

さ、最初くらい飛ばして書いてもいいですよっ！？

最初ですからっ！

第02話 メイドの仕事に他意はない

珍しく、昔の夢を見た。

それは今でも忘れるわけがない、初めて彼女と出会った日の夢。

父と共に外出していた際に、道を外れた木の陰で倒れ込んでいた彼女を見つけた時は、本当に驚いたのを今でも覚えている。

あたしは混乱するあまり何をすべきか分からなかった。血まみれでボロボロの服を着た自分と同じくらいの少女を見て、冷静に対処できるのならばその人間は賞賛に値する。

さすがのあたしも気が動転、後から馬車を降りてきた父は最初こそ目を見開いて驚いていたが、すぐに仕事人間の顔になって自分が羽織っていたローブを脱ぐとそれで少女の身体を包み込んでヒョイと持ち上げた。

決して肉体派、とは言えない父でも軽々と持ちあがったのだから、あの時彼女がどれほど衰弱し、やせ細っていたのか想像に難くない。

あの時、少女の顔の左半分には血で白い所がないほどの包帯が巻かれていた。

あたしはそれが意味するところを理解せずに、包帯を交換しようとした。

だから、正面から見てしまった。

包帯の裏に隠されていた彼女の顔の左半分を。

見るも無残に焼き爛れたようになっていて、とてもじゃないが直視して良いものではなかった。

そして案の定、あたしは胃の内容物を道にぶちまけてしまった。

よほど長い間、適切な処置もされずに放置されていたのだろう。行き倒れていた間に蛆が湧いていたその傷痕は彼女がどれほど過酷な人生を歩んでいたかをこれでもかとあたしと父に見せつけてきた。

あの頃は目立った騒乱もなかった。

何者かに襲われて、命からがら逃げのびてきたのか、とも考えられたが彼女のボロボロの服の間から覗いていた黒光りする鉄の物体を見て、彼女がまともな世界に生きていなかった事を思い知らされた。

こんな夢を見たが、あたしは悪夢とは思わなかった。むしろ懐かしい思い出を思い出すことが出来て懐古の情に包まれてしまったほどだ。

彼女とは今では主従の関係以上に親しい。

あたしは彼女に絶対の信頼をおいているし、彼女もきつとそうだろう。

こんなことを考えていると自意識過剰かと思われてしまいそうだが、事実なのだから致し方ない。

しかし、なぜ今になってこんな夢を見ているのか不思議でならない。もはやこの記憶はさして重要ではない。彼女はもうあの時の彼女ではないし、前を向いて歩いている。彼女にあの時点以前の記憶がないのは不幸中の幸いだ。

あんな傷を負うような過去を思い出してほしくなかったのはおそらくあたしの屋敷の者の総意だろう。

父は彼女の素性を探ろうとさまざまなパイプを駆使していたようだが、不思議な事に彼女に関する情報は一切なかった。本来生まれた時に作られる戸籍すら残されていなかった。

あれ以来、父が彼女の調査を続けているかどうかあたしが知る術はない。

あたしも彼女の過去をそこまでして知りたいとは思わないし、知りたくもない。あたしにとって大切なのは今なのだから。

そう、今なのだ。

実はすでに夢から覚めているという事を改めて言うておかなければならない。

誰に？

さあ、あたしも理解できていない。

そしてあたしにとって大切なのは今現在だ。

あたしの今現在大切な事は

。

「お嬢様、朝ですよ」

「あと5分」

わずかばかりの睡眠だと言っておこう。

「あと5分」

「駄目です、今すぐ起きないと遅刻してしまいますよ？」

一度、寝づらそうに寝返りをして瞼を開けたため、今日は恙なく起床するかと思った少女は一瞬フランの顔を見ると再び布団の中にもぐり込んでしまった。

フランはため息をつきながら再度少女に起床を呼びかけるが、返ってくるのは「あゝ」だの「うゝ」だの言う少女の呻き声だけだ。

このままでは埒が明かないと判断したフランは部屋で少女の持ち物である私物を整理していたグラントに視線を送る。

「……仕方ないな。許す、やってしまえ」

しばし考えを巡らせた後、グラントは「ただしお手柔らかにな」と前置きしてからそう呟いた。そしてそそくさと部屋の外に出ると部屋にはフランと少女の2人だけになる。

グラントが執事としてはあまりよろしい行為ではないであろう、扉を随分と大きな音を立てて閉めると、布団の中にもぐり込んだ少女の身体が外からも見えるほどビクツと震えた。

「も、もしや……、今、2人、だけ……？」

「その通りです、お嬢様。さて、今お嬢様に許された選択は2つです。1つ、大人しく布団からお出になられて制服に着替えるか、2つ、あたしに強引に朝の清々しい風にその寒い恰好で放り出されるか、です」

「今すぐ起きる！」

布団がベッドの上で宙を舞う。

そして燃えるような紅い髪の毛がその陰から姿を現し、フランはにっこりと笑みを浮かべた。

「おはようございます、レティアお嬢様」

「あ、あなたねえ、いい加減主に対する態度を覚えた方が良いわよ……」

眠りの世界から脅迫まがいの事をされて引き戻されたレティアが恨めしそうにフランを睨み付けるが、フランの笑みはその視線を軽々と弾き返す。

「おや、あたしは何もしておりませんよ、お嬢様。それよりも早くお着替えてください。朝食は出来ています」

「まったく、いつからこんなに生意気に……」

レティアが不満げにそんな事を呟いた瞬間、フランの視線がレティアに照準を合わせた。

「お嬢様」

「な、何かしら？」

「先に謝罪しておきます。失礼」

「はあ ツー!?」

レティアが言葉の意味を理解するよりも早くフランは動いた。

まずは上だ。

レティアの身体の前にある6つのボタンを目にも止まらぬ速さで外すと反対側の手で真上に引く。服に引つ張られてレティアはいわゆる「万歳」の姿勢になり、フランはそうなった瞬間にパジャマの上を剥ぐ。

その時点でレティアが顔を真っ赤にし始めているが、フランはそれに意を介さずすでに用意されていたレティアの着替えを手にとるとレティアが露わになっている胸を隠す間も与えずにブラジャーを着させる。そしてその上からシャツを着せ、次は下に

「何やってるのよ!」

思い切り蹴られてしまった。

顔面にレティアの裸足の蹴りが思い切り入ったおかげで眼帯が外れそうになってしまい、慌ててそれを抑えていると燃えるような紅いオーラを身に纏ったレティアがその眼前に立ちふさがった。

「もう一度聞いわよ、フラン。あなたはいったい何をしようと、いえ、したのかしら……?」

「もちろんお召替えを

きやつ」

再び蹴られる。

先ほどより軽めであつたが、それでも相当強い事に変わりはない。

「『きゃっ』って何よ！　あなた頑丈でしょうが！！」

「メイド長に『女の子らしい仕草』を覚えるよう言われたのですが」

「使いどころが間違つてるのよ！」

「はあ、お嬢様、何をそんなに怒つてらっしゃるのか理解できないのですが、このままですと朝食抜きですよ？」

「うぐっ……分かつたわよ。着替えるからもう勝手な真似はしないで……」

朝から大声を出す羽目になったレティアが心底疲れた声でそう言つと、フランは起き上がつて着替えをレティアに手渡す。

「お嬢様」

「ん、今度は何よ」

「おはようございます」

挨拶は大切だ。

こればかりは毎日欠かさず行っているからもはや習慣になっている。レティアはさっきまでの空気はどうした、とでも言いたそうな顔をしつつもフランに顔を向けると、小さく口を開いた。

「……おはよ
」

「お嬢様、おはようございます」

「おはよう、グラント」

レティアが着替えを終えた頃合いを見計らってグラントが部屋に戻ってきた。

「うむ？ どうしたフラン、その顔は」

入ってすぐに、グラントは若干赤くなってしまったフランの顔に気が付いた。些細な事にもすぐに気が付ける観察眼が必要、という事を言っていたのはグラントであったかメリスであったか。

「お嬢様に蹴られました」

「おやおや、あまり暴力に訴えては駄目ですよ、お嬢様？」

「酷い目にあっただのはこっちなのよ！」

先ほどの事が思い起こされてレティアは耳まで真っ赤になる。

おそらく叫び声は外まで聞こえていたから、グラントも何故こういう状況になったのかは理解できているのだろうが、さすがにそれを面と向かって言う事ではない。

「お嬢様、暴れられると髪の毛がうまく……」

レティアは今フ란に髪を梳いてもらっている。紅く長い髪は背中
の半ば程度まで伸びているため、自分で手入れするには些か面倒
なのだ。

レティアは白色を基調とした、「制服らしい」制服を着ている。ブ
レザーはボタンが正方形の頂点になるようにお腹の前にあり、胸元
には獅子をモチーフとしたエンブレムがある。スカートは膝上数セ
ンチといったところで、こちらも上に合わせて白を基調としている。

上下共に服の節々に青い装飾がされており、白を基調とした制服の
中でその青が際立って見える。

「今日は激しく動くような予定もないから、軽めで良いわよ?」

「そう言っただけいつも家に走って帰ってくるように思えるのですが」

「あれは……、ほら、突然動きたくてうずうずしてるっていうか、
なんというか……」

「……いつも通り、ポニーテールにしておきましょう」

レティアの髪型はひとえに髪型をセットする人間にかかっている。
レティア本人がやりたいと言う時も稀にあるのだが、稀なために左右非対称になる事がほとんどだ。

それも考えた上での左右非対称ではない。言ってみれば「ツインテールにしようとしたら束が3つにも4つにもなる」レベルだ。

手先は器用なのだが、自分の髪の毛の話が別な様だ。

「あれっていつつも後ろの奴に引っ張られるのよ」

レティアが鏡越しに後ろのフランに視線を飛ばしてくる。

「引っ張りやすい所にあるのは否定できませんね」

綺麗にまとめて星のアクセサリーのついた紐でポニーテールを完成させると軽くレティアの肩を叩いてやる。

「ん、ありがとう」

「どういたしまして」

レティアは鏡でおかしなところがないか確認するが、特に目立った違和感も無いようで満足げに頷くと、椅子から立ち上がって部屋の扉へと向かう。

扉の横で待機していたグラントが扉を開き、レティアはノンストップで部屋を出てリビングへと歩を進める。

「うう、ようやく暖かくなってきたわね」

「確かに、今年の冬は一段と寒かったですからね」

「おかげでお嬢様がなかなか起きていらっしやらないので苦労しましたがね」

グラントが悪意のない表情、口調でそう言うが、先ほどのフラン同様ダメージをレティアが受けている。

「まったく、うちのメイドも執事も、どうしてもこう主を敬わないのかしら？」

「敬ってますよ、お嬢様」

声を揃えてフランとグラントが良い笑顔をしてみせる。

これだけでレティアを撃沈させるには十分だ。

結局のところ、この屋敷ではメイドも執事も家族同然に近い。

そのため、相手が主であっても態度が激変するような事はない。皆同じように接している。

これを始めたのは他でもないこの屋敷の主、つまりはレティアの父親である。

クラウド・ファルケン、ファルケン家現頭首にしてこの国グラディアラス王国の大臣の地位にいる。他人にも自分にも厳しく、自ら率先して仕事を受けるためどうしても屋敷に帰ってくる機会が少なくなっており、現在も1週間も屋敷に戻ってきていない。

ファルケン家は代々王に仕える重役の地位にあり、クラウドもこの国に3人いる大臣職の椅子の1つに就いている。この3人は三本柱とも呼ばれており、この国の重要な政策や案件に対して強い権限を持っている。実質、国のナンバー2である。大臣の間で地位の差はないため、協力し合って政治を行っているそうだ。

クラウドはその中でもまとめ役のような存在で、それまで陰悪だった議会と大臣との軋轢を埋め、王の声が国の隅々まで届く様にインフラ整備を推し進めている。

そのせいか出張で遠くに行くことも多く、そういう際はグラントがお供している事もある。

ともかく、レティアの父親であるクラウドはなかなか屋敷に戻ってこない。

そのためレティアが実質上の主のような地位になっている。基本的にはフランたちメイドや執事はレティアの言う事は聞くが、当然クラウドの命令の方が上位に存在していることも忘れていない。

いざという時の優先順位というやつであろう。

「はあ、……と、そういえば明後日までの宿題があったんだっけか」

「はい、魔法学45ページ掲載の炎系魔法を形にしておくようにと、ありました」

「忘れてた、どうしよう、さすがに間に合わないかも」

「ですから、今日明日は徹夜の御覚悟を」

グラントがニヤリと笑みを浮かべる。

この世界に生きる人間は、生まれながらにして精霊と契約している、
と言いつたえられている。契約する精霊の種類によってその者が使用
できる魔法の種類も変わるとのことだ。

例えばレティアは炎の精霊と契約している。契約の証である燃える
ような紅い髪と、目を持っている。

その者の髪の毛と目の色は契約した精霊の種類によって決まるもの
だが、基本的にその血筋は受け継がれるものだ。両親が炎と水の精
霊と契約していれば、その子はそのどちらかとなる事が大半を占め
ているが、もちろん例外は存在し、まったく違う精霊と契約してい
ることもある。

「うう、そのまま翌日寝坊したい……」

「ご安心を、お嬢様。時間きっかりに起こしてさしあげます」

「フーラーン」

レティアは前者だ。

父親であるクラウスの血を色濃く受け継いでいる。

「グラントさん、あたしを同席しても？」

「課題にか？ それは構わないと思うが、どうするんだ？」

不意にフランがグラントにそう尋ねたので、グラントは意外そうな顔をした。そして一瞬フランの腰にぶら下がる30センチを超える大きさの銃に視線を向ける。

「最近鍛錬を怠ってしまっているの、グラントさんにご指南をと思ひまして。お嬢様の課題も助言くらいは出来ると思うのですが…」

「フラン、前にも似たような事をして酷い目に合ったじゃない。あなたの説明って擬音が多すぎるのよ」

「ま、前とはもう違います。あの頃はまだ、その、言葉もあまり覚えてませんでしたし……」

レティアが呆れたような表情でそう言うと、フランは若干頬を赤らめて言い返した。

「お嬢様、問題ないでしょう。それに、私も久々にフランの腕を確認しておきたいです」

「グラントがそう言うなら別に構わないけれど、次の日仕事が出る程度に手加減しておいてよね？」

「前は2日ほど寝たきりにさせてしまいましたからね」

「思い出したくもない……」

メリスとは違い、グラントには護身術などもフランは教わっている。グラントは執事の嗜みとして主人が危機の時それを乗り切るだけの

技術と経験が必要だと常々言っており、フランとも組手や実戦形式の訓練を行っている。

素手での近接戦闘から、魔法を交えたより現実的なものまで、その種類は幅広い。

なんでもグラントは依然国軍で嘱託講師をしていたらしい。要は兵士の教育係を務めていたのだ。グラントは茶髪、世間一般に土の精霊と呼ばれる精霊と契約している。

炎や水と違ってそれ自体を作り出すと言う訳ではなく、既に存在する土や石、砂と言ったものを自在に操る事が出来る。これは他の魔法とかなり勝手が違い、後先考えずに使いすぎると自分の足元を言葉通り掬われることになると言う。

「よし、それじゃ今日は帰ってきたら早速特訓ね。中庭を使いましょう」

「分かりました。では用意をしておきましょう」

「頼んだわ、グラント」

このファルケン家の屋敷は町の真ん中に近い場所にある。当然隣にも家が並び、前の道を行き交う人の数もそれ相応に多い。夕方から夜にかけて魔法の練習などすれば、近所迷惑になってしまうのは目に見えている。

「土結界は防音性に優れていますからね」

「うむ、このような使い方をするとは考えもしなかったがな」

人間が作り出す結界はその者が契約している精霊の種類で異なる。

グラントの場合は土で作りに出される結界、レティアであれば炎を薄く伸ばしたような結界を作る事が出来る。この場合、物質的な意味でグラントの結界は防音性に優れている。

結界と言っても外と中の世界を切り離すだけで、それが存在することは見ればすぐに分かる。特に夜中に炎の結界など作れば、かがり火になって安眠妨害になるだろう。

「お嬢様の魔法はよく爆発しますからね」

「仕方ないじゃない。水とか雷と違って調整が難しいのよ」

レティアがふて腐れて顔を背ける。

そんな他愛もない会話をしている間に、3人はリビングへ到着した。既にそこにはメリスやクレアが集まっており、レティアの起床を待っていた。

「「「おはようございます、お嬢様」」」

「おはよ。ってもうこんな時間!?!」

リビングの壁掛け時計に目をやってレティアの眼が見開かれる。

「ですから、早く起きてもらいたかったんです」

「くっ、朝食を逃す訳にはいかないわ。すぐに持って来なさい！」
ファルケン家の朝はいつもにぎやかだ。

余談だが、フランはハムの原産地を問われてまともな答えを出す事も出来ず、グラントにことごとくフォローされる羽目になった。

第02話 メイドの仕事に他意はない（後書き）

ひゃっほーい、どうも、こんにちは、こんばんは、おはようございます、ハモニカです。

序盤くらい書き溜めしてある話をチマチマ修正しつつ連続して出そうと思った次第であります。

順調な滑り出しになればいいのですがねえ。

では。

誤字脱字報告、ご感想、お待ちしております。

第03話 メイドは案外昼が暇（前書き）

存外順調に執筆が出来たので3日連続で投稿。

第03話 メイドは案外昼が暇

「行ってきますー!!」

「行つてらっしゃいませ、お嬢様」

レティアが慌ただしく屋敷の玄関から飛び出していく。

結局、朝食を流し込むようにして食べ終えたレティアはグラントが持っていた学生用のカバンを引つ手繰ると踵を靴に入れる暇すらなく走り出していた。

フランとグラントがそれを見送り、レティアが見えなくなるとそこでようやくフランは大きく伸びをした。

「朝の仕事終了、と」

基本的に、主がいない屋敷のメイドと執事は仕事がない。もちろん、庭の手入れや掃除は必要不可欠だが、何も全員でやる必然性はない。シフト制になっているため、シフトがない者は朝とレティアが帰ってくる夕方から夜にかけてしか仕事がないという場合もある。

そういう場合、住み込みの者は自室でプライベートな時間を過ごしたり、グラントのような自宅通勤の者は一度帰宅するという事も出来る。

シフトは何が起こっても対処できる最低限の人数が確保されている

ため、突然の来客などにも対処は出来る。

とは言うものの、来客者はほぼ屋敷の主人に用があるのだからフ란たちとしては何も出来ない事の方が多いのだが。

グラントは喉の所までしっかり締めていたネクタイを緩めると一息ついて屋敷の中へと戻っていいこうとする。執事の制服を着こなすグラントは凛々しいが、ネクタイを緩めるとワイルドさが加わる。

「グラントさん、中庭に結界を頼めますか？」

フ란は玄関から中に入ろうとしていたグラントを呼び止め、そう頼み事をする。

「練習か？ 分かった、用意するから少し待ってくれ」

グラントはさして気にする様子もなく屋敷に入ろうとしていた身体を翻して中庭へと向かう。

この屋敷の特徴の敷地面積に対して屋敷が比較的小さいという事だろう。そのため必然的に庭が占める割合が増え、丹精込めて育てられた花や井戸水を使った小さな池も作られている。休憩時間には池の近くで疲れを癒す者も少なくないし、フ란もその中の1人だ。

中庭の中でも周囲に何も無い開けた場所に出る。そこは表からは見えない場所にあり、そこだけ芝生がなく茶色い土が露出している。

グラントは土が露出している場所に立つと小さく息を吸い込む。

その瞬間、土が浮かび上がる様に地面からそそり立ち始め、2つの

分厚い土壁が並行して構築される。フランとグラントはその壁に挟まれるような位置に立っており、壁は高さを増すと徐々に角度をつけ始め、ついには2人の頭上で結合、トンネルのような形になる。

壁には等間隔で穴が開いており、中にいてもそれほど暗さを感じる事はない。

「目標はどのくらい必要だ？」

「そうですね……、200個ほどお願いします」

「夜の鍛錬に向けて気合が入っているな」

「久々にグラントさんに教えてもらえるんです。この機を逃す気はありません」

フランの言葉にグラントが少し照れつつも嬉しそうな笑みを浮かべる。

その間にもフランが要望した「目標」の構築を開始する。壁から突き出るように円状のものが突出し、トンネルの向こう側に小さな突起が姿を現す。

「フランのおかげで土の操作が随分と上手くなったな。本を読みながらこれくらいなら出来そうだな」

「前はいつも嫌な顔をしていましたよね」

「当たり前だ。3時間も4時間も土とにらめっこなんて、普通は無理だ」

グラントはため息をつくとトンネルから出ていく。

「練習を止める時に声をかけてくれ。それまで私は読書だ」

「分かりました。ありがとうございます、グラントさん」

フランが礼を言うとグラントがヒラヒラと手を振る。

フランはグラントが視界から消えると目の前に向き直り、無数の的を見据える。現在トンネルの向こう側までで見えている的は5つほど、土で出来ている事を利用して不定期に壁の中に戻ったり、地面に潜ったりするようになっており、狙いをつけるのは容易ではない。

腰の後ろに回していたホルスターから黒光りする銃を取り出すとポーチから鉄球を無造作に取り出す。

シリンダーを取り出すと6つある穴に鉄球を入れていく。この作業は地味に面倒臭く、1つひとつ入れていると最短でも10秒かかってしまう。そのためフランは平べったい円柱状の道具を使う。

判子のような持ち手がついており、底面にはシリンダーの穴の大きさに合わせたへこみが付いている。鉄球をあらかじめこのへこみに入れておくことで、装填の時間を大幅に減らせるようにしているのだ。といってもこの方法はフランが考えたものではなくいつも1個ずつ装填しているフランを見てグラントが試しにと考案した方法だ。これのおかげで鉄球が穴に入らず地面に落ちるというストレスが生まない事が起こる回数は激減した。

鉄球を装填するとシリンダーを元の位置に戻して一息つく。

「ふう

」

目を開き、銃を持った右手をまっすぐ伸ばす。

「『アフエシマス』起動」

小さくそう呟くと、銃身の溝が仄かに光り出す。青白い光は銃身からシリンダーへ、そしてグリップへと伸びていき、銃を持つ手までその光がたどり着くと光の線はグリップから手の甲へと乗り移ってくる。

『アフエシマス』というのはフランの銃の名前兼この青白い光の線を擁するシステムの名だ。

この銃は前時代のように火薬を使用して弾丸を発射するものではなく、使い手の魔力を爆発させて弾丸を発射する。

そのため銃に魔力を供給するラインが必要だ。それが青白い光の正体である。

フランの手の甲まで伸びた光の線はそこで止まり、銃へフランが持つ魔力を吸出し供給する。

このシステムにより理論上持ち主の魔力が枯渇するか、弾がなくなるまで撃ち続ける事が出来る。銃身の摩耗も多少影響を受けるが、ほとんど気にならないほどだ。

いつからこの銃を持っているのか分からないが、不思議と身に着けていると心が穏やかになる。

「あたしの過去の記憶と今を繋ぐ唯一の……。フフ、何を言ってるのやら……」

記憶を失うと言うのは不思議な気分だ。

きつと失いたくなかった大切な記憶もたくさんあったのだろう。

だが、記憶を失うと記憶を取り戻したいという気持ちとどうでも良い、という2つの意識が生まれる。きつと思いださない方が良い記憶があるだろう。

自分がまともな幼少期を送っていなかったであろう事は自分の顔の左半分を見ればすぐに分かる。

物心、と言っているのか定かではないが、この屋敷に来てからの記憶しかないフランにはそう形容しなければならぬものが身についた頃から、何故かこの銃だけは手放す気にはなれなかった。

そして今日も身体の一部になってくれている。

『アフエシマス』が起動されると青い光の帯が魔力を銃に供給するパイプとなる以上、身体の一部になるのは当然だ。そして銃が自分の身体の一部になる様に、フラン自身も銃の一部となる。

呼吸と心臓の鼓動を同調させ、手振れを最小限にまで減らしていく。意識を銃と標的に集中させると不意に周りの音が静かになって自分の呼吸と心臓の鼓動が異様に大きく聞こえるような錯覚に襲われる。

「すう

」

狙うは一番手前の標的だ。直線距離にしておよそ15メートル、中央に円状の模様が描かれているそれに流れるような動作で銃口を向けると間髪入れずに引き金を引く。

バガンッ！！

到底それが発するとは思えないほど巨大な発砲音が響き渡る。

アフエシマスはいわゆるダブルアクションの銃だ。引き金を引くだけで撃鉄が上がり、下ろされるという2つの動作を行う。火薬の代わりの魔力に引火し、装填されていた鉄球が猛然と発射されると標的のど真ん中を寸分の狂いもなく撃ち抜く。貫通した鉄球が土の壁にめり込むが、強靱な壁はその貫通は許さない。

撃ち抜かれた事を確認するかのように少し間を開けると中央を穿たれた標的がボロボロと崩れてただの土くれに戻る。

「腕は鈍ってなさそうですね……」

自分の肩が違和感を持っていないか確認しながらフランは独り言を呟く。

銃を握る右手の中指、薬指、小指を開いたり閉じたりさせながら、銃を手に馴染ませる。指を開いたとしても、青い光の帯があるため銃が手から落ちるような事はない。逆に言えば銃を手放したければ『アフエシマス』のシステムを停止させる必要がある。

銃を使っている1つだけ自分の身体に感謝をした事がある。自らの隻眼だ。

健全であれば、左右の目のわずかな距離の違いから誤差が生まれてしまう。それを人間の脳は修正して焦点を合わせるわけだが、隻眼であるフランはそもそもそんな事をする必要がない。右目から入る視覚情報をそのまま利用することが出来るのだ。

その事を呟いた時、グラントが複雑そうな顔をしていたのは物忘れがひどいフランにしては珍しくはつきりと覚えている。

バガンツ！

また引き金を引く。

今度は30メートルほど先、トンネルの右に寄った地面から突き出した土の人形の頭部を撃ち抜く。

だが、今度はそれで終わらず右から左に銃を動かしていき、その過程で銃口の前に来た標的を左に移動させるという動作の過程で排除していく。

標的に合わせて発砲、また合わせて発砲という訳ではなく、全体の流れの中でその狙いを定めると言ったところだろうか。

何も考えず、ただ視界に入る標的を次々と撃ち抜いていく。

ある程度標的が減ると新たな標的がトンネル内に追加される。その

うち上下左右に動くような標的まで現れ始めるが、フランはその未来位置を正確に予測して標的の中央に鉄球を撃ちこんでいく。

（右……右……左……下……そこ）

動く標的はその規則性を見出す必要がある、とグラントに言われた事がある。

だが、正直フランにはそれをする必要はない。

物体が動くその寸前の、その刹那の瞬間を捉えてフランは次に標的がどの方向に動くか容易く予想出来てしまう。

6発全てを撃ち切ると、視線を向ける事もなくシリンダーを外し、鉄球を補充していく。この動作1つ取っても、一切の無駄がなく、必要最低限の動きで行われる。

鉄球を装填すると軽く銃を振ってシリンダーを元の位置に戻し、再装填の間も睨み付けていた標的に銃を向け素早く引き金を引く。

次々と標的を破壊していく様子を見ると、フランは無意識のうちに笑みを零していた。

（アフエシアスは裏切らない）

この銃は自分の思い通りに動いてくれる。身体の一部と称したが、そうじゃなくともフランにとって頼もしい相棒であることに違いはない。

（絶対に……）

それはもはや確信の域に達していると言っても過言ではない。毎日欠かさず手入れを行い、塗装以外は常に万全の状態を維持させている。塗装は1回に数百発撃つため新しく塗ったとしても簡単に剥げてしまうため放置している。そのため日に日に黒い塗装が剥けているのだが、フランはあまり気にしている様子はない。

引き金を引く度に銃口から帯の色と同じ青白い発砲炎が一瞬トンネル内のものを青く照らす。

「あつ……」

そんな事を考えていたせいか、標的を1つ撃ち漏らしてしまった。撃ち漏らしたと言っても中央に命中させる事が出来なかっただけで、標的自体にはしっかり弾痕が残されている。

「65発中64発、と」

外したところまでに撃った数を確認し、頭の中で反芻させる。

「65人目がお嬢様に襲い掛かるかもしれない、と」

これは自己暗示に近いものだろう。

実戦で外したらその敵がレティアや友人に凶刃を向けるかもしれない。強迫観念じみたそれを頭の中で繰り返し呟き、自分の中で「絶対に外さない」という決意をする。

「……………よし」

しばらくして銃を地面に向けて頭の中の整理をしていたフランは目を開き、気を取り直す。

標的の動きは止まっていた。

おそらく銃声が途絶えたのに気が付いてグラントも一息ついていたのだろう。フランが黙ってトンネルの壁を軽くノックすると、それまで動きを止めていた標的が一斉に動き始める。

ほとんど無作為とも言える標的の動きは、全てグラントによって遠隔操作されている。

つまり、同時に数十個の標的に意識を集中させ、なおかつ破壊されたものは破棄し、その分新しい標的を作り出すという作業もしているのだ。

フランは感謝しつつも、よく頭がパンクしないものだ、と内心舌を巻く。

その後、フランは自らの胃が空腹に悲鳴を上げるまで引き金を引き続けた。

「ん、休憩か」

空腹に胃が悲鳴を上げたのをきっかけにフランの命中率は著しく低下した。一度腹の虫が鳴くとどうしても昼食の事が脳裏を過り、特訓に集中できなくなってしまったのだ。

そうじゃなくとも既に数時間銃を引き続けたのだ。そろそろアフエシアス自体を休ませないといけない頃合いだ。おそらく今この銃に液体をかければあっという間に蒸発してしまうだろう。

「空腹には勝てないようなので」

「腹が減っては戦は出来ぬ、とも言つ。デックスに昼食を作ってもらおう」

トンネルから少し離れた小さなテラスで椅子に座って優雅なひと時とでも言うべき時間を過ごしていたグラントは読んでいた分厚い本を閉じるとゆっくりと立ち上がり、フランのために作り出していたトンネルを地中に戻していく。

するとトンネルがあつた場所からフランたちのいる方へ地面が波打つように動き、フランの前まで来ると盛り上がり地面から小さなお盆のような物体がせり出してきた。そのお盆の中には銀色に光る鉄球が入っている。フランが撃った鉄球を全て回収してきたもので、フランはグラントに礼を言うのとそれをまだ撃っていない鉄球とは違うポーチに入れる。

この鉄球はあまり無駄にして良いものではない。

魔法技術が発達するこの世界では銃のような武器自体が稀有な上、その弾丸ともなるとそれこそ製造しているような奇特な人間はいない。この鉄球にしても、デックスとグラントが調理場で作った代物なのだ。

屋敷の廃品にするしかない金属のものをかき集めて熱し、液体になったらグラントが作り出した土の型に流し込んで鉄球を作った。いわば2人の汗と涙の結晶と言える。血は流していないので除外される。

そういう訳であるため、回収できないような事が無いようにしている。

現在鉄球は全部で400発ほどあるが、ポーチに入れているのは200発ほどだけだ。残りはフランの部屋の引き出しの中に収められている。

屋敷の中に戻り、廊下をグラントと共に歩いていると反対側からメリスが音もなく歩いているのを視界に捉えた。

遠くから見ても、それがメリスだとすぐに分かるのはその歩き方、仕草、どれを取っても際立っているからだろっ。

「あら、その組み合わせを見るに練習をしていたのかしら？」

メリスはこちらに気が付くとニコリと笑みを浮かべながらそう尋ねてきた。

グラントの土結界は防音性に優れているため分厚くすれば壁の反対側でも一切音が聞こえないというくらいのものが作れる。おかげでこのように屋敷の中という極めて至近な場所でも銃声は聞こえない。

「ああ、今夜手合せをするからその練習だそうだ」

「手合せ？ レティアお嬢様の宿題のついで、と言ったところ？」

「はい、もちろんお嬢様の宿題が全て終わったら、という話で終わらなかったらそちらを優先しますが」

「そうならないように頑張りなさいな」

ふふつと笑いながらメリスはグラントの脇を通り過ぎて今フランたちが歩いてきた道を進んでいく。

そしてその途中で思い出したように足を止めて振り返る。

「昼食ならリビングの机に置いてあるわ。私とクレアは頂いたから後は2人で食べて大丈夫よ」

「それはすまないな。だがメリス、あまりクレアをいじめてやるなよ？ 先ほども声が聞こえてきたが」

グラントが苦笑しながらメリスに言うと、メリスは物凄く良い笑みを浮かべてみせる。

「あれはいじめじゃないわ、賤けよ？ そもそも掃除のはずが汚れを増やすんだから、私じゃなくとも叱咤の1つするわよ」

「クレアはたまにおっちょこちよいですからねえ」

「あらフラン、あなたがそれを言うのかしら？」

「うぐ……」

うつかり漏れたフランの呟きに素早くメリスのツツコミが入る。

メリスは最後に小さく手を振ると曲がり角を曲がって2人の視界から消える。

それを確認してからグラントはフランに顔を向けた。

「フランの最初はクレア以上だったからな」

「……言わないでください。少なくともお皿はもう割りません」

「ならいい」

グラントが父親のようにフランの頭を撫でる。フランも少し恥ずかしそうな表情はするが嫌がるそぶりは見せない。

グラントが父親なら、さしずめメリスが母親と言ったところか。

そんな事を想像してメリスの厳しい教育風景を思い出したフランは人知れず身震いをしてしまった。

第03話 メイドは案外昼が暇（後書き）

むきやー、男少なめとか言っておいてもう2人出てきてるじゃないですか！

……ですが！

全体で見ると相当少ないんです！

きつとそうなる予定！

では！

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

第04話 メイドで戦闘狂は（相手に）死亡フラグ（前書き）

うむ、サブタイトルは考え無しだからどうしようもない。

第04話 メイドで戦闘狂は（相手に）死亡フラグ

「ただいま」

玄関から若干疲れを感じさせる声が響いてきた。

フランはその時自室にいたが、わずかに聞こえたその声に素早く身体を起こしてベッドから立ち上がる。服についたしわを軽く伸ばして外していたガンベルトを腰に巻く。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

部屋を出て玄関の方へ向かう途中でメリスにバッグを預けて歩いていったレティアを見つけるとフランはすぐさま腰を折って彼女の帰宅を迎えた。

「ん、ただいまフラン」

午後もほぼ練習に費やしたフランは全てで4桁を越す回数だけ撃ったフランはレティアの帰宅まで自室待機という事になっていた。

因みに昼食はデックス特製カツサンドだった。

時間が経って若干冷めていたが、それでもパンに挟まれたカツの外側はサクサク、中はジューシーという素晴らしいものだった。基本的にデックスは一から全て作る事を信条としているため、ソースから何まで材料を取り揃えては時間をかけて自分の納得のいくものを作るようにしている。

そのため、その出来栄は素晴らしいという一言では言い表せないほどだ。

全部で2人分、8個ほどあったのだが、あまりにフランが食べたそうな顔をしていたためグラントが1つ分けてあげるといふ始末になるほどだ。

「夕食の前に少し課題を片付けておきたいわ。グラント、用意は出来ているかしら？」

メリスに渡したバッグの中から学校で使っている教科書を取り出すとレティアはリビングへ向かわず昼間にフランが銃の練習をしていた中庭に出る。

中庭に出るとすでにその場にいたグラントにレティアが用意が出来ているか尋ね、グラントが小さく首を縦に振った。

昼間と同じように、だがはるかに大規模な土の結界と壁をグラントが作り出すと、随分と傾いて隣の建物の影に隠れようとしていた太陽を隠し、一気に中庭が薄暗くなる。

夕方であるため余計暗く感じるため、メリスがバッグを置いてきたついでに明かりを幾つか持って中庭に戻ってくる。

フランはその間にテラスにある小さな白いテーブルを中庭に運んでくる。

「夕食になったら休憩という事にしましょうか。ええと……」

メリスがフ란の持ってきたテーブルに明かりを置くと懐中時計を取り出して時間を確認する。

「今17時半ですので、19時には」

「分かったわメリス。さあグラント、フ란、どんどん練習するわよ」

テーブルに厚みのある教科書を置くと付箋の挟まれたページを開く。そのページは右半分が完全な説明文、右半分には簡単な図と普通の説明文とは違い太い文字で強調されている言葉などが書かれている。レティアはそのページを指でなぞって読みながらそれを反芻するようにブツブツと独り言を呟いている。

フ란はテーブルの反対側からレティアの邪魔にならないように教科書を覗き込んでみる。明かりの反対側から覗いているため自分の影でレティアの手元が暗くならないように注意しながら教科書を逆さまに読んでいく。

「炎を持続的に作り出すことで炎の帯を作り出す技術ですか……」

「フ란、あなたよく逆さまでそんなに早く読めるわね」

「何度もやっていれば慣れます」

フ란は苦笑しながらレティアに言い返す。

「あなたほどの魔力の持ち主が目の前でお手本を見せてくれれば、よっぽどはかどったでしょうけどねえ」

「はは、そればかりは……」

一瞬、レティアの言葉にグラントとメリスの表情が強張ったように見えたが、フランはあえて無視する。レティアも悪気があって言っているのではない。もう1年の付き合いになる。これくらいの冗談にいちいちフランも反応しないようになった。

フランが魔法が使えない少女であることなんて

。

それを初めて、自分の事として認識したのはそれほど昔の話ではない。

この屋敷に来て、メリスやグラントが言葉から礼儀作法、人間として生きるための術を全て教えてくれた中で、フランのそれに触れないはずがなかった。

この世の人間は須らく精霊と契約している。^{すべか}世界はこれを前提に回っているも同然だ。

そのため、それこそ「1年に1人生まれれば奇跡という名の不幸」などと言われるほど、魔法を使えない人間はこの世にいない。仮にいたとしても、表の世界に姿を現す事などほぼ皆無に等しい。

理由は至極簡単で、生まれた瞬間に両親が殺すか、本人が成長して自分の事が分かるようになった頃に自殺する、というのが多いからだ。フランも自分の事を調べる過程で自分と同じような境遇の者がいないか調べる事はしている。

魔法が使えない者は特に「インペリティア」と呼ばれる。

人間社会で生きていくうえでの根本的な物が欠け落ちているわけだから、その影響は生まれてすぐにまずはその両親に向けられる。

能無しを生んだ親。

それがこの世界でどれほど重いレッテルなのか、フランには分からない。

だが、魔法を使えない子供が辛い思いをしてまで人生を送るくらいなら、今ここで自分たちが始末をつける、と考える親もいるだろう。自分たちのために、そして何よりこれから暗い人生を歩むことが決定的である子供のために、自らの手を血で染めてまで名もない我が子を殺すのである。

仮にそれを免れたとしても、一般社会で生きていくのは並大抵の事ではない。

通常の学び舎にはまず入学出来ない。

書物によると、そういったインペリティアに分類される人間は皆一様に「無」を象徴する白い髪をしていると言われている。目は何とか色を判別できる程度の灰色、生まれて髪の毛もない子供が精霊と契約しているかいないかは、主に目を見て判別されている。

その点、フランは過去の例から一線を画している。

髪も目も闇を思わせる黒だ。今被っているウィッグも目に入れていくカラーコンタクトも世間体を考えてこの屋敷の者たちが用意してくれたものだ。

そうでなくともフランは顔の左半分が人目に見せられないような状況だ。この眼帯が無ければ人前には決して出られたものではない。

フラン自身は、自分が魔法を使えない事が辛いと思つた事は一度も

ない。

過去には思っていた時期があったとしても、今のフランはそれを覚えていない。

なにしろフランの記憶はこの屋敷にやって来た1年前から始まっており、それ以前の記憶は何もないのだから。

普通なら、誰しもお近づきになりたくない人物に分類されるであろうフランだが、この屋敷の者たちは違った。フランだからと言ってどこか他人行儀になるようなことも一切ない。その点、フランは記録に残っているような者たちとは全く異なった人生を歩んでいると言える。

とはいえ、レティアに魔法の事で何か尋ねられても、答えようがないのは歯がゆい。

調べてもらったところ、フランは人並み外れた魔力をその身に宿しているらしい。だが、肝心の魔力を魔法に変換する機能、つまりは精霊との契約の事だが、それがなかったために宝の持ち腐れになっているのだ。

レティアが幼い頃使っていた簡単な魔法の教科書を読んでその仕組みや言葉に出来る範囲での使い方は理解できる。

けれども結局はやってみないとどのようなものか理解することは出来ない。魔法の使えないフランには一生かかっても実を結ぶことのないことだ。

だが、フランは自分の境遇を悔やんではない。むしろ魔法が使える

ないからこそ、自分にしかできない事もある、と考えている。今はそんな状況に巡り合っていないが、自分の手で出来るといふ事に感謝しながら生活するようにしている。

自分の手で触れ、感じて、初めて分かる事もある。全自動にすらする事が出来る魔法では不可能な事も、だ。

それに、フランは決して無力ではない。

自分を守る手段も、自分を主張する手段も持っている。

そして何より、それを聞いてくれる家族がいる。

フランにとっては、それが全てであつた。

「はあっ！」

威勢のいい掛け声と共にレティアが手の平から炎を作り出してみせる。

「……いつも思っんですけど、それ熱くないんですか？」

「何を言ってるのよ、フランは。熱いわけないでしょう？」

「なぜ？」

「なぜ、って言われても困るわね。そういうものなのよ！」

「そういうものなんですか」

レティアが魔法の制御に集中させると言わんばかりに語尾を強めるが、フランは気にする様子もなくレティアの言葉をメモ帳に書き留める。その場で分かったとしても、どこかに書いておかないと忘れた時困るので、フランは常に新品のメモ帳を持ち運ぶようにしている。

大体の場合、1冊に1週間分程度の情報を書き留めており、既にその冊数は優に50を超えている。その全てがきちんと整理されてフランの自室の引き出しの収められている。

レティアはペンを走らせるフランから視線を自分の手の平に戻すと反対の手をその作り出した炎の上にかざす。

そして炎を引っ張る様に手を持ち上げると、ユラユラと燃えていた炎がその手に引っ張られて徐々に伸びていき、帯状になっていく。

「その調子……、その調子……アッ」

上手い具合に伸びつつあった炎の帯がレティアの顔ほどまでに伸びたところで千切れてしまう。それまで一つながりの炎だったが、今はレティアの両手で小さく揺れている。

「あと少しだったのになぁ」

「確か課題は１メートルでしたか」

「正確には両手を横に広げるくらい、なんだけどね。これじゃ明後日までとか無理かな……」

レティアが残念そうにため息をつく。

「……………お嬢様」

「フラン？」

顎を撫でながら考え事をしていたフランが顔を上げてレティアに近寄る。

「お嬢様の場合、魔力を燃料に炎を焚いている、と考えると良いんですよね？」

「随分と適当だけれど……、まあそんなものね。それがどうしたの？」

フランは顔の前で人差し指を立ててみせる。

「あたしが思うにですね。お嬢様は『炎』自体を強引に伸ばそうとしているように思えます。ですが先ほどの考えから行くと、伸ばすべきなのは炎ではなく『魔力』なのではないでしょうか？」

「……ええ、と。どういう意味かしら？」

レティアが一度では理解できなかったように首を傾げている。

フランは何とか適切な言葉を探し出して自分が感じている違和感をレティアに伝えようとする。

「つまり……このページで習得すべきなのは作り出した炎を伸ばす技術じゃなくて、魔力を両手の間で滞留させること、なのでは？ 魔力が燃料だとすれば、燃料がある場所には必然的に炎が流れます。結果として炎の帯が出来るわけです」

「なるほど、あたしは炎自体を魔力で引き伸ばそうとしていたという事ね、……よし」

レティアがフランの指摘を頭の中で整理した後、もう一度やってみようとする。

今度は炎を先に作るのではなく、両手を合わせるようにして魔力を集める。両手の包まれるような位置にある空間が若干揺らいたところを見るに、レティアの手の平の中で無色透明の魔力が渦巻いていると見ていいだろう。

「よっ」

手の中の魔力が霧散しないように気を付けながらレティアは徐々に手と手の距離を開いていく。ゆつくりと、だが確実に『魔力』の帯がレティアの身体の前で作り上げられつつある。ここに魔力を検知する装置でもあればそこには魔力の帯がしっかりと映し出されることだろう。

レティアは焦らず腕を広げていき、ついに大きく腕を横に開くまでに至った。帯の長さだけ考えれば、軽く1メートルは超えている。

後は炎を作り出すだけだ。

レティアが自らの魔力に力を込める。

両方の手の平から生まれた小さな炎は瞬く間に魔力の帯に沿って大きくなり、レティアの身体の正面で左右の炎が1つに繋がる。

見事な炎の帯が作り出され、レティアは嬉しそうに笑みを浮かべてフランの方に顔を向ける。

「ありがと、フラン」

「フフ、お嬢様の实力ですよ」

フランにしても、レティアの事は自分の事のように嬉しい。

ニコリと笑いながらフランはレティアを賞賛する。

「なんだ、私たちは必要なかったかな？」

「あらグラント、役目をフランに取られて悔しいのかしら？」

「そんなわけないだろう」

グラントにメリスが笑みを浮かべながら顔を向けるとグラントが真顔でそれを正面から見返す。

2人がコントのような事をしている間にも、レティアは作り出した炎の帯を自在に操っていく。一度コツを掴むと後は楽なのか、宙に見事なハートマークを炎の帯で描き出したり、星型の図形を作り出してみせる。

「……よし」

上機嫌になったレティアは炎の帯を霧散させると再び教科書に向き直る。習得しておかなければならない魔法技術はこれだけではないため、次のものに進む事にする。

「えーと、炎の投擲？　なんだ、簡単じゃないの」

教科書を読んだレティアはどこか拍子抜けしたような表情を浮かべながらグラントに顔を向けた。

「グラント、的をお願い」

「承知しました」

メリスのちよつかいから抜け出せる、と思ってホッとしたグラントがすぐに土を操って昼間のフランの時に作った標的よりかなり大きな標的を3つ、土壁の前に立たせる。

「そりゃっ」

手の平に作り出した炎をボールでも投げるかのように振りかぶって標的目掛けて投げつけると、一瞬間で揺らいだ火球が次の瞬間には猛スピードで標的へ飛翔していった。

そして標的に直撃、土の標的が砕け散って辺りに飛散する。

「どうよ？」

鼻を鳴らして自慢げにその場にいたフランたちに向き直るレティア。だが、フランたち3人はどこか複雑そうな顔をしている。

「お嬢様の課題は、加減ですね」

メリスが3人の意見を総合して言うと、フランとグラントが「その通り」と数回頷く。

「どうして？ 別に問題は……あっ」

標的を指差してそう言おうとしたレティアはそこで標的のある点に気が付いた。

レティアが命中させたのは3つある標的のうち、中央の物、つまり左右に別の標的が置かれている。

しかし、左右の標的は中央の標的が破壊された拍子に延焼して同様にボロボロになっていた。そして左右の標的には遠くからもはつきりと分かるようにでかかと「要救助者」と書かれていた。

「人質死亡、加減に加えて状況把握を怠ってます」

「んな！？ そんなの課題に書かれてないよ！？」

教科書をグラントの顔の前に持ってきてレティアが猛抗議するが、グラントは謝る素振りも見せず小さくため息をつく。レティアに向かつて口を開く。

「お嬢様、世の中教科書通りの事が起こる事の方が少ないのです。あらゆる場合に対処するためには、日ごろからその心構えが必要です」

「それとこれは話が別でしょう！」

「いいえ、関係大あります」

レティアの反論を即座に切り返すグラント。何やらようやく自分の出番という事で喋りたくてうずうずしているのだろうか、若干楽しそうにレティアに向き合っている。その口ぶりはどことなく軍人気質を感じさせる。元教官は伊達ではないという事だろう。教えるという事に関してはフランやメリスより一日の長がある。

「ああなったグラントさんは、そう簡単に止まりそうにありませんね……」

「あらフラン、私も同じことを考えていたわ」

フランが独り言のように言っているとメリスが含み笑いをしながら相槌を打ってきた。

「どうしましょう、こうなるとあたしたち出来る事がないのですが……」

「そうねえ、夕飯はクレアとデックスでどうにかなってしまおうでしょうし……、ねえ、フラン」

「……なぜそこであたしを見るんでしょうか、メイド長？」

何か、とてつもなく嫌な予感がしたフランはメリスから一步退く。
メリスがすごく良い笑顔で開いた一步を即座に詰めるとフランの肩を両手で押さえる。

「1戦、やりましょう?」

「嫌です、メイド長の場合、『やる』じゃなくて『殺^やる』ですから」

「つれない事を言わずに、さあ」

メリスは有無を言わず銃を取るよう促し、自らは虚空から剣を取り出す。

これもフランからしてみれば羨ましい技術だ。

魔法技術を応用することで別次元とも言える空間に武器を納める事が出来るのだ。これを使えば大荷物を持って外を歩く必要は実質なくなるが、まだ一般に広まっている技術ではない。使用できるのは熟練者ぐらいであるが、メリスはその類に属している。

メリスが取り出したのは鞘のない無骨な剣だ。もともと空間という

場所に収めているが為に鞘が必要ないのだ。また腰に吊って歩くわけでもないため装飾をつける意味もない。

「て、手加減を……」

「久しぶりの手合せだから、保証は出来ないわ」

「あの、あたしグラントさんとの手合せもあるのですが……」

「大丈夫、加減してあげる」

「言ってることが矛盾しているのに気が付いてます？」

苦笑いするがメリスは怪しげな笑みを浮かべるだけで答えを返してくれない。

グラントとは特訓をしてもメリスとはしない理由にはこれもある。基本的にメリスは厳しい事はあれど決して暴力に訴えるような事はない。

だが時折、丁度今のように無性に戦いたくなることがあるようだ。その時ばかりは普段のメリスも鳴りを潜め、戦闘好きのようになっバトルマニアてしまい、実力と相まってまず勝ち目はなくなる。

「そうね……、10分私の攻撃を凌いでもらなさい。それでいいわ」

「10分、ですか。あたしにとって3時間にも感じられるでしょうね」

「それじゃ、行くわよ」

風が唸った、そんな感覚を受けた次の瞬間にはメリスがフランの目の前で剣を振りかぶっていた。フランはそこまでのメリスの全拳動を把握していたが、あまりの速さに驚いてしまった。

ガギンッ！

とつさに銃身で振り下ろされた剣を受け止めると眩い火花が散る。銃口に近い場所に左手を添えて押し負けないようにするが、それでも身体が後ろに押されているのが分かる。どう考えても手加減をする気はないと思えない。

「メイド長、やっぱり殺る気でしょうっ？」

「あら、何を言っているのか分からないわ」

「ああ、そうですかっ！」

もう、それをメリスに求めるのは止める事にする。渾身の力で剣を押し返すと一歩飛び退いて銃口をメリスに向ける。

そして間髪入れずに2発撃つ。

1発目はメリスの足を狙って撃つ。足を狙われたメリスは横にステップして避けるが、そこに2発目が飛び込んでくる。宙にあるメリスはそれを避ける事は出来ないため、あえて1発目を圏にしての2段階構えの攻撃を試みたのだ。

ほんの一瞬、15メートルと離れていない距離で銃が撃たれてからメリスにたどり着くまでのことからコンマ1秒あったかどうか分からないほどののだが、その一瞬メリスが少しだけ笑みを湛えたような気がした。だがその真意に気が付く前にメリスは剣を振って弾を弾き飛ばし、余裕を持って着地する。

「はは、相変わらず化け物じみてますね、その剣捌きは」

「それは私にとって褒め言葉よ、フラン」

軽く剣を振ってみせると触れてもいない地面がズバリと斬れる。装飾がほとんどされていないメリスの剣は実用性一辺倒であるため、その性能は破格だ。

高速で飛翔するフランの弾を迎撃できるのは人並み外れた動体視力と腕力、そして優秀な相棒のおかげと言える。

だがメリスは別段特別な事をしたという表情をするわけでもなく、剣を構えなおす。

「さあ、あと9分と20秒、頑張りなさい」

「はは、自信ないです」

フランは乾いた笑いをしながら銃を構えるしかなかった。

第04話 メイドで戦闘狂は（相手に）死亡フラグ（後書き）

メイド＋銃＝ロベータ

メイド＋剣＝ロルタ（ver・銃剣）

え？

大いに間違ってる？

だってハモニカはそれくらいしか知らないんですもの。名前だけ知っている人ならそれなりにいるかもしれませんが、原作読んでいる、とかになると話は別です。

え？

足技の方？ 誰ですか、それ？ww

とまあブラ○ラネタを言いつつ今日も投稿するハモニカです。

まあ、人それぞれってやつですよw

何とか投稿休止に追い込まれるであろう年末年始の前にある程度投稿しておきたいのでして、時間を見つけてはチマチマ書いております。

そうですね、あと二話 いけるか……。

では。

誤字脱字報告、ご感想お待ちしております。

第05話 メイドは用意が良くなくては（前書き）

メリークリスマス、なわけですね。

しっかり遊んでから投稿することにしました。

正確には昨日ですけどね。

では、どうぞ。

第05話 メイドは用意が良くなくては

結論から言う事にしよう。

突如バトルマニアのような事を言い出したメリスと模擬戦をやる羽目になったフランは20分と持たずに喉元に剣の切っ先を突きつけられることになった。

遠距離武器である銃と近接武器である剣、この組み合わせでは銃の圧倒的有利は確かに揺るぎないものであっただろう。事実フランは極力自分がメリスの射程距離に入らないよう常に距離を取って戦っていた。メリスは距離を詰めないとフランを攻撃出来ないが、フランは近づく必要などない。遠距離から一方的に倒す事も可能であったはずだ。

それが出来なかったのは、撃った弾をメリスが弾くという離れ業をこなせる事にあった。1発弾いて即座に第二撃を迎撃できるほどの剣速を持っているメリスにとって最大6連射のフランの攻撃を全て無効化するのにそれほど苦労はいらなかったのだろう。フランが6発撃ち終えて再装填する隙を突いて一気に距離を詰めて自分の間合いで戦うようになるのに、それほど時間はかからなかった。

それでもフランとしては善戦した方と言っても良い。

再装填しつつ距離を取っていたら突如目の前にメリスが現れたのだ。再装填を失敗しなかっただけマシと言えるかもしれない。

とはいえ、この距離では撃つにはあまりにも不利だった。撃とうと狙いをつけても素手で銃身を握って狙いを外されてしまうのだ。これでは撃ったところで到底命中などさせることはできない。

「ふう、とはいえ20分、持たせるとは上達したわね、フラン」

繰り返される剣撃を銃で防ぐのには限界がある。

いかにアフエシアスが30センチというおよそ拳銃とは思えない規格外の大きさとはいえ、所詮は銃、1メートルを超える剣を凌ぐには役不足だ。アフエシアスは強度面でかなり頼りになるが、それでも五月雨式に降りかかる攻撃のおかげで再装填すらままならない状況に追い込まれてしまった。

「うう、メイド長、まだ腕が痛いのですが……」

「あら、ごめんなさい、軽く冷やしましょう」

勝負を喫したその時、メリスは銃を思い切り捻った。それはつまり繋がっているフランの腕も捻られたようなものだ。手を離してそれを回避できなかったがゆえに、フランは右腕を摩りながら若干表情を歪ませる。

メリスも戦いの中とはいえ自分がやった事には責任を持ったため、足早にフランに近づくとポケットから氷囊を取り出してフランの袖を捲って患部に当てた。

「ひゃう、……というかメイド長、どこから氷囊を……？」

「メイドたる者、主が欲した時になんでも出せなければ話にならな

いわ」

「それはつまりメイド長の服の中に冷蔵庫があるという事ですか？」

「ふふ、どうでしょう？」

思わしげな表情をするメリスを見ているとあながち冗談に思えなくなってしまう。

メイドとしてメリスが圧倒的に優秀なのは、こういった、先を読めるところなのかもしれない。

自らの主が何かを欲するであろう事を職業本能で察知してあらかじめ用意しておく。今のフランにはとてもじゃないが真似できない芸当だ。そもそもそうだとするとメリスは主だけにとどまらず、フランたちの事も完全に把握しているという事になる。

24時間体制で屋敷内の全ての人の行動を把握しているのか、と想像してしまったフランは目の前でジツと氷囊を見つめているメリスがどこか不気味にすら思えてしまった。

「それはそうと、フラン」

「つと、はい？」

不意にメリスが声を上げたためフランは氷囊を落としてしまいそうになった。

慌てて左手で氷囊を押さえ、顔をメリスに向ける。

「あなた、手加減したでしょう？」

メリスがどこか面白くなさそうな表情をしている。

フランは一瞬返答に困ってしまいが、こればかりは仕方のない事だと割り切って小さく首を縦に振った。

「やっぱりね。どう考えても弾が弱すぎると思ったのよ」

「万が一にも怪我をさせてはいけないと思ひまして……」

「そのおかげであなた自身が怪我をしては元の木阿弥よ？ それにあなたは私に手加減できるほど強くないでしょうに」

そう言われると反論のしようがなくて閉口してしまうが、かといって本気を出せば確実にメリスに怪我をさせてしまうのが分かりきっている。

アフエシアスは魔力を火薬代わりにしているため、込める魔力の量を変えれば威力も変化する。フランは自分の感覚で非殺傷、対人、対物・対魔法障壁と魔力を込める量を意識的に変化させることで威力を制限しているのだ。

当然ながらメリス相手には非殺傷、当たっても人体を貫通しない程度の威力の弾を撃っている。これが対人以上となるとおそらくメリスの持つ剣を砕きかねないほどの威力になってしまう。

大量の魔力を込めればそれ相応の威力を持つため、理論上アフエシアスの威力に上限はないと言える。フランが保有する魔力が尽きるまでという条件付きではあるが、身を守るには十分すぎるものだ。

それに、この平和なご時世、練習、模擬戦以外でアフェシアスの引き金を引くことはまずないと言っている。

「あなたが言いたい事は分かってるわ。だけどそれじゃあなたのためにならないのよ、フラン。教えを乞う者が全力を出さないのでは教える側もどうすればいいのかわからなくなるわ」

「……分かりました。でも人相手には絶対使いたくないですから……」

それは心に決めた事だ。

アフェシアスを使うような事態になっても、絶対に人を殺すような事にだけはしたくない。

何故、自分がこんなものを持っているのか時折不思議にすら思えるが、その理由は思い出せない。

「さて、あちらも終わったようよ」

「というよりそちら待ち、だったんだがな」

メリスが振り返りながらそう言うとグラントの声が返ってくる。

グラントの隣では満足そうな表情をしているレティアが炎を器用に操って「遅い」という文字を作り出している。

「お嬢様、フランたちも一段落つきましたし、夕食にいたしましたしよ
う」

「ええ、もとよりそのつもりだったわ。しかしフラン、相変わらずとんでもない動体視力ね」

レティアが近寄ってくるとフランの腰にぶら下がるアフエシアスを指差しながらそう言った。

「メリスの剣撃をそれで受け止めるなんて、普通無理よ?」

「グラントさんとメイド長の日々の特訓の成果、ですよ」

「む……なんでそこにあたしが入っていないのよ」

「いや、失礼ながらお嬢様からあたし、何か学びました?」

「言葉から服の着方まで教えたのは誰だと思ってるのよ」

「まことに申し訳ありませんでした、お嬢様」

もはや黒歴史、という単語すら覚えたフランにとってその手の話は自分の赤っ恥をさらけ出すようなものだ。即座に謝って即座にレティアを屋敷の中へと連れていくことにした。

存外早くすべきことも済んだレティアは夕食を食べ終わるとバスルームへ向かっていった。

それを見送るとフランはそそくさと庭に出てガンベルトを外して先ほど出したテーブルの上に置いておく。

しばらく準備運動をしながら夜の少し肌寒い風に慣れようと身体を動かしているとグラントがスーツを脱いだ恰好で姿を現した。さすがに運動するのに仕事着を着ている訳にもいかないのだろう。

因みにフランは普段から来ているメイド服のままだ。

そもそもメイド服自体が非常に動きやすいように作られており、特にファルケン家が使用しているメイド服は見た目よりも実用性を重視しているため、見た目はそれほど華やかとは言えない。

フランはグラントが出てきたのを確認すると袖を捲り、グラントの前に立ちはだかる。

「メリスにやられたのは大丈夫か？」

「問題ないです。あれくらい、ものの数分で完治しますよ」

メリスに捻られた右手首を氣遣ってそう聞いてきたグラントにフランはヒラヒラと手首を振ってみせる。フランも自分のこの体質には感謝している。フランがこの屋敷に来た当初は彼女にしてみれば思い出したくもない失敗談がたくさんあるのだが、やはり食器を割ったりしてしまった時に怪我をしてしまう事も少なくなかった。

だが、切り傷程度の傷だと半日もあれば完治してしまうという、驚異的な治癒能力をフランは身に着けているのだ。痛みは伴うのでフランは極力怪我をしないようにしているが、万が一怪我をしても大抵の怪我は自然と治す事が出来る。

それは当然グラントも知っているが、それでも心配してくれるのが彼らしいところ、とも言える。

「それでは、行くぞ」

「はいっ」

グラントの合図と同時に、フランがグラントとの距離を一気に詰め、その顔面に遠慮のない右ストレートを食らわせようとする。グラントはフランの右ストレートを首を捻って回避するとその腕を掴んで自分の後ろへ引っ張り、そのまま放り投げる。

「相変わらず、人を軽々と投げますね……」

空中で体勢を立て直してグラントの背後に着地したフランは悔しげな表情をしてみせる。

それを見たグラントが振り返って笑みを浮かべながら腕をフランに向けて構えを取った。

「女性が軽いと言われるのは褒め言葉だろう?」

「それとこれとは話が別、です!」

再びグラント目掛けて突っ込む。

初撃の右ストレートは先ほど同様軽く回避されるが、今度は右ストレートの直後に身体を反転させてグラントの腹に回し蹴りを食らわせる。一瞬回し蹴りの衝撃でグラントの身体が「く」の字に曲がるが、吹き飛ばすことはなく足でしっかりと地面を捉えている。まるで地面に根を下ろしているかのようにビクともしない。

見ればグラントは腹に決まっていたと思われた蹴りを左手の手の平で受け止めていた。そしてフランの足をがっしりと掴んでフランの身動きを封じている。そして右手をフランの足首に当てると強引に足を回してフランの体勢を崩させてきた。片足立ちになっていたフランに崩されたバランスを取り戻すだけの余裕はなく、なす術もなく地面に倒されてしまう。

「ふむ、少し鈍ったか? 二撃で終わるようではお嬢様はお守りできんぞ」

「グラントさんが敵になったら素直に諦めます、じゃ駄目ですか?」

「むろん、駄目だ」

フランが冗談を言うとグラントが凄みのある笑みを浮かべてその冗談を一刀両断する。

「いいか、フラン。お前はアフェシアスを持っている。近接戦闘を主とする者に対しては絶対的なアドバンテージを持っているんだ。敵の間合いまで近寄らなければ一方的に敵を倒すことが出来るはずだ」

（いけない、教官モードになってしまいましたか……）

先ほどのレティアの時と同じような口調になったのを感じ取り、フランは内心で後悔してしまう。

こうなってしまうと基本的にグラントは徹底的な鬼教官になり、身体の中でも特に耳が痛くなる始末だ。得られるものはとても多く、勉強になるのだが、精神的な疲弊は並々ではない。

「だが、当然一度敵の間合いになれば距離を取らせまいとして再び自分のペースにするのは困難だ。向こうも必死だろうからな。そんな時、何もできずに防戦一方では駄目だ。そのための特訓だと随分前にも言ったと思うが？」

「はい……、言われたと思います、確か……、おそらく……」

記憶にないが、きっと言われたのだろう。

「では、最低でも10回は私に攻撃し、私の攻撃を凌げるようにしてみる。メリスよりよっぽど楽だと思うが」

「どっちも楽しありませんよ……」

そう言いながらもフランも構えを取る。

自宅通勤のグラントが相手をしてくれている事自体、稀なのだ。文句もほどほどに得られるものはどんどん覚える方が得策だ。こう言っただけは語弊があるかもしれないが、フランは頭に入らないため身体に覚え込ませる必要がある。

「よし、では今度は私から行くぞ」

グラントがそう言い一拍置くと、少し足を曲げて力を込めた後フランの足元を狙って蹴りを入れてくる。その蹴りも加減されてはいるが、本気で蹴られれば骨が折れてしまうのではないかというほどのものだ。グラントの蹴りは正確にフランの左足の膝を横から襲い、フランは飛び退いてそれを回避する。関節を蹴りで損傷させ、その後の行動を著しく制限させる予備的な攻撃だろう。

グラントはフランが飛び退くと間合いを開けずにフランが飛び退いた分前に進んでくる。グラントはフランの服を掴みにかかるが、掴まれれば確実に投げられることが分かっているフランはそれを払いのけてわずかな隙を突いてグラントの胸部に一撃を加える。

「よおし！」

だがグラントは堪えるどころかむしろ嬉しそうに攻撃を続けてくる。おそらく自分の攻撃を凌いで反撃してくるフランを見て喜んでいるのだろう。

「ありが、とうございます！」

ところがグラントが笑みを深める度に攻撃の苛烈さがうなぎ上りになるためフランとしては笑いたくとも笑えない状況になる。

それでも、グラントが本当に加減しているのか分からないくらいにわずかな手加減のおかげでグラントによる一方的な蹂躪にはなっていない。メリス相手にアフエシアスを使った時はフランも加減したが、素手で戦う時は手加減などしている余裕はどこにもない。むしろ手加減などしようものならグラントの鉄拳制裁が脳天に入る危険性すらある。

「ほら、脇が甘いつ！」

「え わっ!？」

グラントが黒い笑みをして目を光らせている構図を思い浮かべていたせいで注意力が散漫になっていたようでフランの死角から迫っていた蹴りに気が付くのが遅れてしまった。

グラントの蹴りが脇腹に入り、フランの身体が一瞬宙に浮いて真横に飛んでいく。

肩から落ちそうになったところを手で地面を捉え、そのまま片手で側転ぎみに体勢を立て直して顔を上げると目の前にグラントの膝が迫っていた。

「っ!!！」

正直、フランは敵の間合いから抜けるのがこれほど難しいとは思わなかった。一息つく事も、当然自分のペースに持ち込むことすらこのままでは出来る気すらしない。

顔を狙ったグラントの膝蹴りを間一髪のところまで両手で防御すると、自分の身体がミシリと軋んだのを感じた。

加減していてこれなのだ。本気を出したグラントに勝てる気がしない。

膝蹴りを防ぐために顔の前で腕を構えたのを見たグラントは一瞬フランの視界が自分の腕で塞がれたのを即座に察知、フランが腕を下した時には姿勢を低くして腰の位置に拳を構えていた。

「45点だ」

小さくグラントがそう呟いた直後、フランは鳩尾に強烈な一撃を貰って昏倒してしまった。

「ん……」

「あら、起きた？」

目が覚めると、視界に髪を下したレティアがいた。お風呂上りで上気した顔でフランに視線を向けているが、その顔は呆れていることをこれでもかというほど強調している。

「お風呂から上がって見たらフランがグラントに背負われてるんだもの。想像できたとはいえ、相変わらずね、あなたは」

自分が自室のベッドに寝かされている事に気が付き、身を起こそうとお腹に力を入れると鈍痛が走る。服の前を捲って自分の腹を見ると、うつすらと紫色の痣が出来ている。

「グラントはさすがに帰らないといけない時間だったから、あたしがあなたの看病を引き継いだの。グラントが謝っていたわよ、いつも手加減できずすまない、ってね」

「また、負けてしまいましたか……」

フランが残念そうに首をもたげる。

するとレティアが読んでいた本を閉じてベッドから立ち上がるとフ

ランを見下ろす。

「あなた、多分自分が何をしているか気が付いてないようね」

「どういう、意味ですか、お嬢様？」

「あのね、グラントが手加減出来ないくらいあなたは強いっていう事よ。メリスにしても同じ、あからさまな手加減が出来るほど、あの2人にも余裕はないのよ。グラントの特訓は確かまだ半年かそこらでしょう？ それでここまで出来ているんだから、あなたは自分を誇っていいのよ」

レティアは「そしてそんなメイドをあたしが誇りに思うの」と付け加えると満足げに頷く。

そこでフランは初めて壁掛けの時計に目をやり、時計の針が0時を指そうとしていた事に気が付いて目を見開いた。

「お、お嬢様っ」

「あゝ、分かってるわよ。明日もいつも通り起こしてくれて構わないわ。まあ、あなたが起きれたら、の話だけど」

「すいません、あたしなんかのために夜更かしをさせてしまって…
…」

フランはレティアに向かって頭を下げる。もとよりここまで従者の事を考えてくれる主も珍しいだろうが、それに甘んじている訳にはいかない。

「良いのよ、あなたの寝顔、可愛かったし」

「はい？」

ボソツと言われた声が聞き取れず、つい聞き返してしまったが、レティアは上気した頬を隠す様に部屋の扉の方に歩き出してしまふ。

「そ、それじゃ、また明日ね。お休みフラン」

「あ、おやすみなさい、お嬢様」

そそくさと出ていってしまったレティアを呼び止める事も出来ず、ただベッドで中途半端に身体を起こしていたフランであったが、ふとある事に気が付きもう一度時計に視線を向ける。

午前0時、フランがグラントと特訓を始めたのが8時過ぎ頃だとすると4時間は経っている。その間ずっと風呂に入っていたわけはなく、なぜレティアが頬を上気させていたのか不思議になってしまう。

「……………なんなんでしょう？」

さすがに聞くわけにはいかない、と思ったフランはベッドに横になり、枕元にある明かりを消して明日に備えて眠る事にした。

「くっ、我ながら情けない……」

レティアは自室に戻るとそのままベッドにダイブして枕を抱いていた。

「あの寝顔は反則級よ……。女のあたしですら見惚れたじゃない……」

レティアはそんなことを呟きながら布団の中にもぐり込む事にした。

第05話 メイドは用意が良くなくては（後書き）

はい、25日も執筆活動をするハモニカですw

とりあえず、レティアが妙な空気を醸し出してますね、そろそろ初投稿時に出し惜しみたタグを作る頃合いですね……

誤字脱字報告、ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5890z/>

銃と魔法と眼帯とメイドモノ！

2011年12月25日14時53分発行